

答えのない世界に立ち向かう

OB. OG. INTERVIEW



前農林水産省食料産業局長
Eietsu SAKURABA
櫻庭 英悦

PROFILE
秋田県出身。1980年宇都宮大学農学部農業経済学卒業。同年4月農林水産省入省。'01年総合食料局消費生活課物価対策室長。'02年大臣官房参事官。'05年総合食料局食品産業振興課長。'08年北海道農政事務所長。'09年大臣官房情報評価課長。'11年大臣官房審議官(兼大臣官房国際部兼生産局)、(兼総合食料局)、(兼食料産業局)を経て'14年7月より食料産業局長('16年6月まで)。農林漁業の6次産業化や農産物の輸出拡大を進めるとともに、伝統野菜など地域固有の地域産物の復興と振興に向けて、地理的表示保護法の成立などに尽力してきた。現在、農林水産省顧問。

「答えのない世界にどう向かって行くのか、それぞれの立場からアプローチして欲しい」。宇大生へのメッセージを求められて櫻庭英悦前農林水産省食料産業局長が語った言葉である。その思いは、前例主義に陥ることなく、新しいことに果敢に挑戦できた自らの官僚人生と重なる。「写真上：右からインタビュー／宇都宮大学国際学部4年・伊勢万梨乃、同農学部3年・後野仁奈、櫻庭英悦氏」

■変えたことが前例になる
東京・霞ヶ関、農林水産省食料産業局長室。少し緊張気味の学生から宇大発ベンチャーが開発した包装容器「フレシエル®」に入ったスカイベリーを贈られ、笑顔を見せる櫻庭局長。果肉に触れずに輸出できることを説明され、「コストはどのくらい?」と、すかさず聞き返す。「(農水省は)輸出にも力を入れているので、こういうものもヒントになります」こんなやりとりからインタビューは始まった。

「こはとてつもなくレベルの高いものを求められるところ、自分の実力では10年もたないだろうと、最初は腰が引けていました」と入省時の思いを明かす。それから36年間の官僚人生。「仕事がおもしろかったのですね。福島県や北海道、経済企画庁でも仕事をしました。同じことばかりやっていない。いろいろなことにチャレンジできた。その時点その時点でやりたいことがあった」と振り返る。

「敢えて新しいものに取り組みたかった。そのつもりで仕事をやってきました。『役所は前例主義』という話をよく聞くとありますが、前例を一度変えてみる、それを2年3年続けて行けば、変えたことが前例になります。『食育』の一般化やトレーサビリティの導入など新たな分野に向き合ってきた。今は介護食品のJAS規格化に取り組み。」

■農業に直に触れる実習が新鮮だった

秋田県出身。宇都宮の雷の多さに驚いたという。「雷は冬に鳴るものかと思っていた。秋田ではみぞれが降る頃にもすごい雷が鳴る。宇都宮に来て、なんで雷が夏に鳴るのか不思議だった。当時、宇大に雷の研究をしている先生がいて、『雷の道』があることを教わりました」農場での間引き作業やみかんの缶詰作りなど農業実習が特に印象に残っているという。「農業経済学科は社会科学の文献などの調査が中心だったので、実際に農作物に触れたりする実習が非常に新鮮でした」

福島県の農家に泊まり込んだの調査実習が一番の思い出。「学生たちは3、4人ずつに分かれてそれぞれの農家に宿泊するのですが、一緒に泊まった学生の1人だと思えます。地域と一緒に育っていくという視点は忘れたいで欲しい」と語る。そして後輩たちへのメッセージ。

「大学のテストには答えがありませんが、社会生活には答えがない。答えのない世界にどう向かって行くのか。自然科学系でアプローチするのか、僕らのように社会科学でアプローチするのか。個々人の考えを尊重しながら、いろいろな方法でアプローチしていくって欲しい」

「私は、答えのない世界をずっと歩いてきました。今でも無我夢中なところがあります」

◆取材を終えて

国際学部4年 伊勢万梨乃
今回収材を受けてくださった櫻庭さんは農業経済学科を卒業した方で、私の先輩にあたります。初めてのインタビューでしたので緊張しましたが、櫻庭さんはとても気さくに、楽しそうにお話してくださったので、リラックスして取材することができました。櫻庭さん自身のお話だけではなく、6次産業化や今後の食についてなど様々なお話を聞かせていただき、大変勉強になりました。今回の経験を、今後の学生生活に活かしていきたいです。

人が出されたカレーを2杯、3杯とおかわりしたため「宇大生はカレーが好き」という評判がたち、(他の学生が泊まった)どこの農家も食事はカレーになった」と笑う。

英文の原書で農業経営学を学んだ同郷の教授の特別ゼミ、農業経済学、農政学、会計学、農業史……それぞれの担当教授の名前を挙げ、「大学は何をするところか、今でも課題になっています。研究するところ、教育するところ、いろいろあると思いますが、農業経済学科は、教育が強かった、しっかりしていたという印象です。今にして思うと、バリバリのすごい先生たちがいました」と語る。



宇大学生時代の櫻庭氏 (1979年頃、自室にて)

■農山漁村の生活の質の向上に資する

農水省入省のきっかけは教授の勧めだった。「とにかく「公務員試験を受けなさい」と。当時、農水省は農業経済職を採用していました。試験の時期、友だち4人と車で東北一周旅行を計画していたので、一次試験を仙台会場の東北大学で受けました」という。中央省庁に陳情に行った経験のある公務員の父親から霞ヶ関の役人の仕事ぶりは聞いていた。

もう一つ農水省を志した理由があった。実家は兼業農家で、父親が稲作の農業散布で皮膚がかぶれてしまう姿を目にし、「なぜ、かぶれるものを食べ物にまくのか。農業や化学肥料は極力少なくすべき」という思いがあった。「実際に役所に入ってみると、雨が多く虫が発生しやすい気候風土の中で丈夫な食物をどう育てていくかが最大の関心事になるので、基本は農業を減らすべきという流れが世界的に出てきている。そういうものをみんなが求めていたのだと思います」

役所が正面から向き合うことが難しいテーマは「場外」と自ら表現するフィールドに手がかりを求める。無農薬リンゴの栽培に成功し「奇跡のリンゴ」として話題を呼んだ青森のリンゴ農家、木材秋則さんたちと無農薬、自然栽培の問題に取り組み。

今、力を入れている施策は6次産業化の推進だ。「米、野菜、果物をそのまま出荷するのではなく付加価値を付けて消費者の皆さんに届ける。1次産業に携わっている人が単なる生産者だけではなくて、生産物の価値をつかっていくクリエイターの一翼を担う」。それが「農山漁村の雇用を増やし、所得を上げることによってそこに定住する方々の生活の向上に資する」という大きな目標につながる。



*このインタビューは櫻庭氏が食料産業局長在職時の平成28年3月28日に行われたものです。
【インタビュー：伊勢万梨乃・後野仁奈／文・写真：アートセンターサカモト・栃木文化社ビオス編集室】